

修士論文（要旨）

2013年1月

大学生の性的態度および性行動と自己存在感の関連

指導 中村 延江 教授

心理学研究科
臨床心理学専攻

211J4006

掛川 史織

目次

| | |
|--------------------------|----|
| はじめに | 1 |
| 第1部 先行研究 | |
| 1. 大学生の性に対する態度について | 2 |
| 1) 性とは | 2 |
| 2) 若者の性交の意味 | 2 |
| 3) 若者の性知識 | 3 |
| 4) 性交の許容度 | 3 |
| ■未婚男女の性交 | 3 |
| ■恋人のいる人の恋人以外との性交 | 4 |
| ■金銭と性交 | 4 |
| 5) ダブルスタンダード | 4 |
| 6) 性的リスクに対する意識 | 4 |
| ■性的リスク | 4 |
| ■避妊に対する態度 | 5 |
| 7) 性的態度とインターネット | 6 |
| 2. 大学生の性行動について | 6 |
| 1) 性行動とは | 6 |
| 2) 若者の性行動経験 | 6 |
| 3) 大学生の性交経験人数 | 7 |
| 4) 大学生の性的リスク対処 | 7 |
| 5) 大学生の性的態度と性行動 | 8 |
| ■性に対する寛容さと性行動 | 8 |
| ■性的リスクに対する態度と性行動 | 8 |
| 6) 性行動と家庭環境 | 9 |
| 7) 性行動と友人関係 | 9 |
| 8) 性行動と社会的スキル | 10 |
| 3. 自己存在感について | 10 |
| 1) 性行動と自己 | 10 |
| 2) 自我同一性とは | 11 |
| ■同一性拡散 | 11 |
| ■モラトリアム | 12 |

| | |
|-------------------------------------|----|
| ■ 同一性地位 | 12 |
| 3) 自我同一性と親密性 | 12 |
| 4) 自尊感情..... | 13 |
| 5) 自尊感情の条件..... | 14 |
| 6) 自尊感情の適応的意味..... | 14 |
| 7) 現代青年の不安定な自己 | 14 |
| 8) 自己存在感の希薄さ | 15 |
| 4. 性行動と自己存在感の希薄さ | 15 |
| | |
| 第2部 本研究 | |
| 1. 意義 | 16 |
| 2. 目的 | 16 |
| 1) 大学生の性的態度および性行動と自己存在感の関連を検討 | 16 |
| 2) 大学生の性的態度と性行動の関連を検討..... | 16 |
| 3. 方法 | 17 |
| 1) 調査対象者 | 17 |
| 2) 調査期間..... | 17 |
| 3) 手続き | 17 |
| 4) 調査内容..... | 17 |
| ① 性に対する態度「性的態度尺度」 | 17 |
| ② 性行動経験「異性との間での性経験」 | 17 |
| ③ 性交渉経験人数..... | 18 |
| ④ 自己存在感「自己存在感の希薄さ尺度」 | 18 |
| 5) 分析方法..... | 18 |
| 6) 倫理的配慮..... | 18 |
| 4. 結果 | 19 |
| 1) 性に対する態度について | 19 |
| ① 尺度の構成..... | 19 |
| ② 平均値と標準偏差..... | 21 |
| ③ 下位尺度得点間相関の検討 | 21 |
| 2) 性行動経験について | 21 |
| ① 性行動経験..... | 21 |
| ② 性差の検討..... | 22 |

| | |
|-------------------------------------|----|
| 3) 性交渉経験人数について | 22 |
| ① 性交渉経験人数..... | 22 |
| ② 性差の検討..... | 23 |
| 4) 自己存在感の希薄さについて..... | 23 |
| ① 信頼性の検討 | 23 |
| ② 性差の検討..... | 23 |
| 5) 性的態度と自己存在感の希薄さについて..... | 23 |
| 6) 性行動と自己存在感の希薄さについて | 24 |
| 7) 性交渉経験人数と自己存在感の希薄さについて..... | 24 |
| 8) 性的態度と性行動経験について | 25 |
| 9) 性的態度と性交渉経験人数について | 26 |
| | |
| 5. 考察 | 27 |
| 1) 性に対する態度について | 27 |
| ① 尺度の構成..... | 27 |
| ② 対象者の性に対する態度について | 27 |
| ③ 下位尺度得点間相関 | 27 |
| 2) 性行動経験について | 28 |
| 3) 性交渉経験人数について | 28 |
| 4) 自己存在感の希薄さについて..... | 29 |
| 5) 性的態度と自己存在感の希薄さについて..... | 29 |
| 6) 性行動と自己存在感の希薄さについて | 30 |
| 7) 性的態度と性行動経験について | 30 |
| 8) 性的態度と性交渉経験人数について | 31 |
| | |
| 6. 総合考察..... | 33 |
| 1) 大学生の性的態度および性行動と自己存在感の関連について..... | 33 |
| 2) 大学生の性的態度と性行動の関連について | 34 |
| 3) 今後の課題..... | 34 |

引用文献

謝辞

資料 質問紙

1. 問題と目的

近年若者の性意識が寛容になり、また性行動が低年齢化、活発化しているといわれている。しかし、すべての青少年の性行動が低年齢化、活発化しているわけではなく、それらがみられるのは一部の青少年である（日本性教育協会，2007）。同世代、同性間における性に対する態度や性行動における差異には、何が関係しているのだろうか。

これまで性行動の心理学的な立場からは、自尊感情の観点で研究がなされてきた。しかし、性交経験の有無と自尊感情の明確な関連は示されていない。ただし、性行動と自己存在感の明確な関連は示されていないものの、Erikson（1968 岩瀬 1982）や Eric Berne（1970 石川・深澤 1999）などが、古くから性行動と自己の関連を指摘している。

また、近年の青少年に対して「空虚な自己」（影山，1999）、「自己存在感の希薄さ」（湯川，2002）、「脆弱な自己肯定感」（土井，2004，2008）など、自己感覚が希薄で脆いという指摘がある。性行動の低年齢化・活発化が一部の青少年の間にみられることと、青少年の自己感が希薄化していることには何か関係があるのだろうか。

よって本研究の目的は、大学生の性に対する態度および性行動と自己存在感の希薄さの関連を検討することである。大学生の性に対する態度および性行動が自己とどのような関わりがあるのかを検討することは、若者の性感染症や HIV 感染、望まない妊娠などの危険性および予防の観点や、心身の健康の維持増進に役立つと考えられる。

2. 方法

首都圏の私立大学に在学する大学生約 550 名を対象に質問紙を配布し、約 344 名（回収率 60.72%）の質問紙を回収した。そのうち有効回答数である 250 名（男性 82 名、女性 168 名）を分析対象とした。平均年齢は全体で 19.39（±1.25）歳、男性は 19.34（±1.35）歳、女性は 19.41（±1.20）歳であった。

質問紙の構成は、①性に対する態度尺度（和田・西田，1991）、②性行動経験（和田・西田，1991）、③性交渉経験人数、④自己存在感の希薄さ尺度（湯川，2002）である。

3. 結果と考察

性に対する態度について

性的態度尺度 46 項目に対して、主因子法・Promax 回転による因子分析を行った。その結果、「性に対する寛容さ」（ $\alpha = .92$ ）、「性による交流」（ $\alpha = .75$ ）、「性に対する責任」（ $\alpha = .62$ ）の 3 因子が抽出された。

性交経験

本研究の対象者の性交経験率は、45.2%（男性 50.0%、女性 42.9%）であった。先行研究（関塚ら 2004，草野 2006）と同様の経験率であり、本研究の対象者は性交経験において平均的な集団であると考えられる。

大学生の性的態度および性行動と自己存在感の関連について

性に対して寛容であるほど、他者との関係や時間的展望において自己の存在感を感じていないことや、性に対して責任感を持っているほど、他者との関わりのなかで自己の存在感を感じることが示され、性に対する態度と自己存在感の間に関連があることが示唆された。

その一方で、デートやキス、性交などの性行動経験および性交渉経験人数と自己存在感の間に有意な関連は認められなかった。自己存在感の低い者の中には、他者との関わりを回避している者や、低い自己感を持っていても性行動相手との関係で補われており、自己感の問題が浮上しないことも考えられる。すなわち、自己存在感の低い者の性行動の取り方は多様であると考えられる。

性に対する態度と自己存在感の関連は示されたが、性行動と自己存在感の関連は示されなかった。その理由として、行動と心理の関連を検討することの難しさである。人間の行動は、ひとつの心理的要素で説明をできるほど単純なものではないだろう。よって、性行動と自己存在感の関連を検討することは容易なことではなく、本研究の方法ではその関連を示すことはできなかったのだと考える。

大学生の性的態度と性行動の関連について

性に対して寛容であるほどに、性行動がすすんでおり、また性交渉経験人数が多かった。これは男性に顕著であることが示され、先行研究と一致した。特に性交渉経験人数を複数人あげた者のなかには、一晩だけの関係であったり、同時進行的に複数人と関係を持ったりした経験がある場合も考えられ、自身の経験と質問項目を照らし合わせて回答した可能性がある。性による交流については、これまでの性交人数がひとりである者が、性交未経験の者よりも性による情緒的な交流を意識していることが示された。初交相手の多くは恋人であり（NHK「日本人の性」プロジェクト，2002）、また初交後は相手と深い仲になれたり、愛情を感じたりすることができたという報告も多い（日本性教育協会，2007）。このことから、性行動相手との関係やそれがどのような性行動であったのかが、性による情緒的な交流を意識する程度に影響するのだろう。

以上のことから、性に対する態度が先行して性行動に移る場合もあれば、性行動から得たものが性に対する態度へと結びついていく場合もあると考えられる。よって、性に対する態度と性行動は関連していることが示唆された。

今後の課題

まず質問紙の回収率の低さがあげられる。回収率は 60.72%であり、回答に偏りがあると考えられる。回収率の低さの一つに、性に対する態度や性行動について回答し辛さがあるためだと思われる。また、性行動という行動に焦点を当てていることである。心理と行動の関連を検討することは容易ではなく、それを質問紙で検討することはより難を極めるだろう。これらの課題をどのようにして解消していくかが今後の課題である。

引用文献

- 安部輝夫 (1998). 性と心身医学—男性の側面から—. 心身医学, 38 (4), 247-257.
- 天貝由美子 (2001). 信頼感の発達心理学—思春期から老年期に至るまで—. 新曜社, pp42-56.
- 土井隆義 (2004). 「個性」を煽られる子どもたち—親密圏の変容を考える—. 岩波ブックレット 633, 岩波書店, pp. 33-53.
- 土井隆義 (2008). 友だち地獄—「空気を読む」世代のサバイバル—. 筑摩書房, pp118—122
- 榎本博明 (1998). 「自己」の心理学—自分探しの誘い—. サイエンス社, pp. 161-201.
- Erikson, E.H. (1968). *Identity: Youth and Crisis*. W.W.Norton.
- (エリクソン, E.H. 岩瀬庸理 (訳) (1982). *アイデンティティ: 青年と危機* 改訂版 金沢文庫, pp. 113-186)
- Erikson, E.H. (1959). *Identity and the life cycle*. New York: W.W.Norton&Company.
- (エリクソン, E.H. 小此木啓吾 (訳) (1973). *自我同一性—アイデンティティとライフサイクル*—. 誠信書房, pp. 111-127.)
- Erikson, E.H.・Erikson, J.M. (1997). *The Life Cycle Completed*.
- (エリクソン, E.H.・エリクソン, J.M. 村瀬孝雄・近藤邦夫 (訳) (2001). *ライフサイクル、その完結* (増補版). みすず書房, pp. 96-103.)
- Eric Berne (1970) *Sex In Human Loving*. Simon&Schuster.
- (エリック・バーン 石川弘義 深澤道子 (訳) (1999). *性と愛の交流分析*. 金子書房, pp. 178—181.)
- 遠藤辰雄・井上祥治・蘭 千壽 (1992). *セルフエスティームの心理学—自己価値の探求*—. ナカニシヤ出版.
- 遠藤由美 (2005). *自己のパーソナリティ認知*. 中島義明・箱田裕司・繁樹算男 (編). *新・心理学の基礎知識*. 有斐閣ブックス, pp. 291—292.
- 深澤真紀 (2006). U35 男子マーケティング図鑑 第5回 草食男子. <http://business.nikkeibp.co.jp/article/skillup/20061005/111136/?rt=ocnt> (2012年11月14日取得)
- 福富護 (1983). *性の発達心理学*. 福村出版, pp. 145-185.
- 福本環 (2004a). 男女大学生の避妊に対する態度—性差・性交経験の有無の差からの検討—. *思春期学*, 22 (2), 227-234.
- 福本環 (2004b). 男女大学生の性交渉に対する態度—性差・性交経験の有無の差からの検討—. *思春期学*, 22 (2), 262-267.
- 福本環 (2004c). 男女大学生の避妊に対する態度—性差, コンドームの使用頻度の差からの検討—. *思春期学*, 22 (4), 527-536.
- Godson P, Bunhi ER, Dunsmore SC (2006). Self-esteem and adolescent sexual behaviors, attitudes, and intentions A systematic review. *J Adolesc Health* 38 310-319.

- 浜田恵 北山修 (2006). 大学生における性に対するネガティブな態度に関する研究—自己・他者への意識の関係から—. 九州大学心理学研究, 7, 147-157.
- 播磨俊子 (2006). 性・ジェンダー. 伊藤美奈子 (編), 思春期・青年期臨床心理学. 朝倉書店, p. 93.
- 長谷川浩 (1975). フリーセックスの社会病理—セックスの人間的意味を考える—. 大原健士朗・岡堂哲雄 (編). 現代のエスプリ別冊 現代人の異常性—性と愛の異常—. 至文堂, pp. 160-174.
- 今野洋子 (2003). 大学生の避妊に対する性意識・行動に関する報告—A 大学の学生を対象とした調査報告—. 人間福祉研究, 6, 101-116.
- 井上松代・西平朋子・賀数いづみ・玉城清子・園生陽子・加藤尚美 (2004). 高校生の性行動と関連する要因の研究. 思春期学, 22 (4), 495-503.
- 影山任佐 (1999). 「空虚な自己」の時代. 日本放送出版協会, pp. 63-77.
- 加藤厚 (1983). 大学生における同一性の諸相とその構造. 教育心理学研究, 31 (4), 292-302.
- 川畑徹郎 石川哲也 勝野眞吾 西岡伸紀 野津有司 島井哲志 春木敏 (2007). 中・高校生の性行動の実態とその関連要因—セルフエスティームを含む心理社会的変数に焦点を当てて—. 学校保健研究, 49, 335-347.
- 河村茂雄・武蔵由佳 (2001). 自我同一性地位を規定する要因の検討—達成動機・親和動機から—. カウンセリング研究, 34 (3), 273-283.
- 木戸久美子 中村仁志 林隆 (2004). 10 代の人工妊娠中絶および出産と抑うつとの関連. 山口県立大学看護学部紀要, 8, 25-32.
- 北原香緒理・松島公望・高木秀明 (2008). 恋愛関係が大学生のアイデンティティ発達に及ぼす影響. 横浜国立大学教育人間科学部紀要 I, 教育科学, 91-114.
- 木原雅子 (2006). 10 代の性行動と日本社会—そして WYSH 教育の視点. ミネルヴァ書房, pp. 2-34, pp. 73-85.
- 木原正博・木原雅子 (2012). 変貌する性行動と性感染症. 臨床と研究, 89 (7), 879-883.
- 厚生労働省 (2011). 平成 22 年度衛生行政報告例. 母体保護関係.
- 厚生省 HIV 感染症の疫学研究班行動科学研究グループ (2000). 日本人の HIV/STD 関連知識、性行動、性意識についての全国調査—日本人の HIV/STD 関連知識、性行動、性意識に関する性・年齢別分析—.
- 黒田祐二・有年恵一・桜井茂男 (2004). 大学生の親友関係における関係性高揚と精神的健康との関係—相互協調的—相互独立的自己観を踏まえた検討—. 教育心理学研究, 52, 24-32.
- 草野いづみ (2006). 大学生の性的自己意識, 性的リスク対処意識と性交経験との関係. 青年心理学研究, 18, 41-50.
- Maslow, A. H. (1954). Motivation and personality. Haper&Row.
(小口忠彦 (訳) (1971). 人間性の心理学. 産業能率大学出版部, pp. 89-117, pp. 272-278.)
- 松井豊 (1982). 対人関係の発達. 詫摩武俊・飯島婦佐子 (共編). 発達心理学の展開. 新曜社, pp. 258-278.
- 間宮武 (1976). わが国青年 (学生・生徒) における性行動の性差に関する調査研究 (その 2) —環境的諸条件との関連における性差について—. 横浜国立大学教育紀要, 16, 29-48.

- 松井豊 (1990). 友人関係の機能. 斎藤耕二・菊池章夫 (編著). 社会化の心理学ハンドブック—人間形成と社会と文化—. 川島書店, pp. 283-296.
- 三井善正 (2005). <新>正と性の教育学. 玉川大学出版, p. 25.
- 宮下一博 (1999). アイデンティティ拡散. 中島義明・安藤清志・子安増生・板野雄二・繁榎算男・立花政夫・箱田裕司 (編). 心理学辞典. 有斐閣, p. 5.
- 文部省編 (1999). 学校における性教育の考え方、進め方. ぎょうせい, pp. 1-8.
- NHK「日本人の性」プロジェクト編 (2002). データブック NHK 日本人の性行動・性意識. NHK 出版, pp. 39-45, pp. 124-133, pp. 187-264.
- n 日本性教育協会編 (2007). 「若者の性」白書 第6回 青少年の性行動全国調査報告. 小学館, pp. 7-21, pp. 24-48, pp. 49-79, pp. 81-100, p. 203.
- 岡田努 (2007). 大学生における友人関係の類型と、適応及び自己の諸側面の発達の関連について. パーソナリティ研究, 15, 135-148.
- 岡田努 (2011). 現代青年の友人関係と自尊感情の関連について. パーソナリティ研究, 20 (1), 11-20.
- 大川玲子 (1998). 性と心身医学—女性の側面から—. 心身医学, 38 (5), 293-299.
- 関塚真美 関秀俊 笹川寿之 三本松恵 伊藤千春 小野真希 芳賀絵里子 岩田知子 稲垣利矢子 岩中美季 (2004). 大学生の避妊行動と STD 予防における自己決定意志. 思春期学, 22 (1), 149-156.
- 清水弘司 (1976). 大学生における性の発達と依存対象について. 心理学研究, 50 (5), 265-272.
- 下山晴彦 (1992). 大学生のモラトリアムの下位分類の研究—アイデンティティの発達との関連で—. 教育心理学研究, 40, 121-129.
- 塩谷芳也 (2010). 高校生の性行動とセルフ・エスティーム. 社会学研究, 88, 1-26.
- 宋昇勲 川畑徹朗 今出友紀子 李美錦 菱田一哉 堺千紘 辻本悟史 中村信晴 陳曦 (2012). インターネット上の性情報への接触が青少年の性行動に及ぼす影響に関する予備的研究. 学校保健研究, 54, 152-161.
- 高橋浩之・佐久間浩美・竹鼻ゆかり (2012). 大学生の性行動と自己管理スキル, 社会的スキル及びセルフエスティームとの関連. 学校保健研究, 54, 144-151.
- 田中千晶・兒玉憲一 (2010). レジリエンスと自尊感情, 抑うつ症状, コーピング方略の関連. 広島大学大学院心理臨床教育研究センター紀要, 9, 67-79.
- 谷冬彦 (2001). 青年期における同一性の感覚の構造—多次元自我同一性 (MEIS) の作成—. 教育心理学研究, 49, 265-273.
- 田能村祐麒 (2004). 各種避妊法と STD. 性の医学財団 (編). 性感染症/HIV 感染その現状と検査・診断・治療. メジカルビュー社, pp. 66-69.
- 豊田加奈子・松本恒之 (2004). 大学生の自尊心と関連する諸要因に関する研究. 東洋大学人間科学総合研究所紀要, 創刊号, 38-54.
- 戸ヶ崎泰子・岡安孝弘・坂野雄二 (1997). 中学生の社会的スキルと学校ストレスとの関係. 健康心理学研究, 10 (1), 23-32.
- 上田公代 宮田歩美 本吉麻衣子 (2004). 大学生の望まない妊娠と性感染症の予防についての意

- 思決定. 思春期学, 22 (4), 537-545.
- 和田実 西田敏男 (1991). 性に対する態度および性行動の規定因 (I) —性態度尺度の作成—. 東京学芸大学紀要1部門, 42, 197-211.
- 和田実 西田敏男 (1992). 性に対する態度および性行動の規定因. 社会心理学研究, 7 (1), 54-68.
- 和田実 (1994). 大学生の性に対する態度, 性行動と恋愛について. 東京学芸大学紀要1部門, 45, 155-165.
- 和田実 (2000a). 大学生の性交経験と個人的背景要因および心理的特性との関連—性交経験者, 潜在的未経験者, 確固たる未経験者との比較—. 思春期学, 18 (3), 273-281.
- 和田実 (2000b). 望まない性行動—性および心理的要因からの検討—. 思春期学, 18 (4), 361-371.
- 和田実 (2001). 大学生の性に対する態度と性行動の関係に関する縦断的研究. 思春期学, 19 (2), 210-218.
- 和田実 (2004). 性に対する態度および性行動の経年変化とそれらの規定因—3回の調査データの比較—. 思春期学, 22 (4), 481-494.
- 渡邊典子 石崎トモイ 池田かよ子 (2004). 大学生の性の実態と今後の性教育のあり方—大学生が受けてきた性教育, 性に関する悩み, 知識や意識, 対処行動の調査から—. 思春期学, 22 (4), 547-554.
- 山口正二 (1999). アパシー. 中島義明・安藤清志・子安増生・板野雄二・繁榎算男・立花政夫・箱田裕司 (編). 心理学辞典. 有斐閣, p. 14.
- 湯川進太郎 (2002). 自己存在感と攻撃性—自己存在感の希薄さ尺度の信頼性と妥当性の検討. カウンセリング研究, 35 (3), 219-228.